

ニュースレター

開催中

第36回企画展 「人々のくらしと石」

【場所】 2階 企画展示室

【期間】 令和6年3月2日(土)～6月2日(日)

自然史資料館では、3月2日(土)より企画展「人々のくらしと石」を開催しています。人類はその歴史の中で“石”を利用して社会生活を営み、文明を発展させてきました。“石”とは、岩石だけではなく、岩石を構成する鉱物や、岩石や鉱物から抽出される物質も含まれます。そのため、私たちが営む普段の生活の中で、その存在に気がつかないことも少なくありません。

大昔には、岩石や鉱物そのものが道具として使われました。それらは石器と呼ばれ、加工すると鋭利になる黒曜岩や流紋岩などを用いて、鏃(やじり)やナイフなどがつくられ、動物を狩猟したり、作物を刈り取ったりするために使われていました。今回は、鳳珠郡能登町にある、縄文時代の住居跡である真脇遺跡から出土した石器を展示しています(図1)。

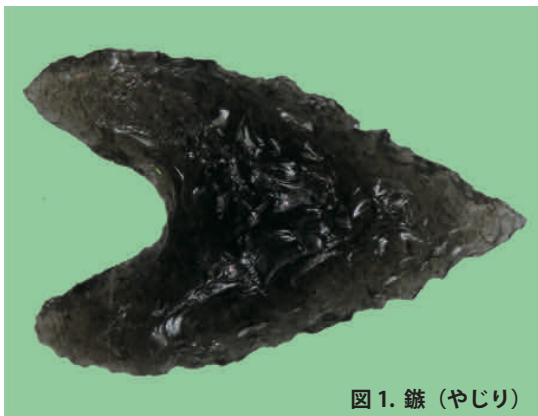


図1. 鏃(やじり)

また、岩石は石材として建築物などに利用されてきました。金沢城の石垣には、戸室山から産出する戸室石(安山岩)が利用されています。戸室石には赤戸室と青戸室の色違いの二種類があるため、石垣がカラフルに見えます。現在では、石灰岩からつくられるセメントを材料としたコンクリートなどが、建築材の主流となっています。

食物などをすりつぶしたりする道具も岩石でつくられ、使われてきました。お茶や大豆などを製粉する挽き臼は今も見かけますが、現在では金属製や機械式の器具にとって代わられています。

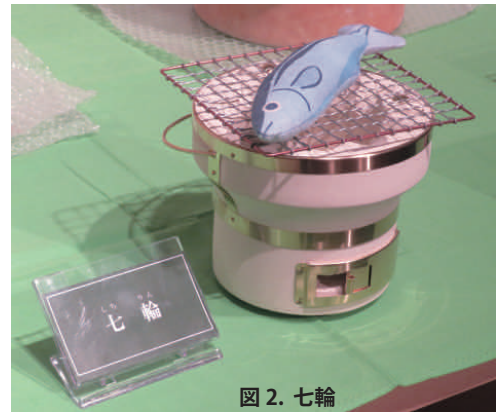


図2. 七輪

粘土や陶石で作られた焼き物は、素材やつくり方を変えて、食器などとして現在に至るまで使われています。石川県では九谷焼と呼ばれる磁器が有名で、その原料となる陶石の鉱山は今も操業しています。

珪藻の化石を大量に含む珪藻土は、耐熱性に優れるため、煉瓦や七輪などの焼成器がつくられます(図2)。能登地方には珪藻土が豊富にあり、地場産業になっています。しかし、今年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」により、鉱山や操業する会社が大きな被害を被ってしまいました。今後の行く末が心配ですが、復興を願っています。

岩石や鉱物は芸術や書にも用いられました。絵画などの着色には、鉱物を粉末にした岩絵の具が使われました(図3)。書道で使う硯は、粘板岩などで作製されます。グラファイト(石墨)でつくられる鉛筆や滑石でつくられる石筆も、筆記用具として今日まで使われ続けています。



図3. 岩絵の具

科学技術の発達に伴い、人類は岩石や鉱石から元素や化合物を取り出すことができるようになると、それらを素材にした道具がつくられ、使われるようになっていきました。特に、鉱石を製錬して得られる金属が用いられるようになると、文明は飛躍的に発展しました(図 4)。金属製の機器や精密機械などは、現代社会においてなくてはならない存在になっています。また、石炭や石油などのエネルギー源も得られるようになると、人々の生活は一変して、更なる文明の発展に繋がりました。



図 4. 鉄鉱石

しかし、我々が利用している物質は、いずれは枯渇してしまう資源であることに加え、採掘による環境破壊は地球にすむすべての生物の脅威となっています。したがって、ゴミとして廃棄される物質をリサイクルしたり、代わりになる物質や技術を獲得したりしなければなりません。

科学技術が発達して、多くの物質は人工的につくられるようになりましたが、天然に産出する希少な鉱物や岩石が、人々を魅了することは変わっていません。道具や機器とは異なり、人々の生活に直接関わるモノではありませんが、これらを使ってつくられた宝飾品や装飾品、工芸品は、富や権力の象徴として扱われ、今日まで財産としての価値を有し続けています。

以上のように、今回の展示では、人類がこれまで利用し続けてきた“石”について、原石や鉱石などをそれらからつくられた製品とともに紹介し、それぞれの特性や用途などについて説明しています。6月2日まで開催していますので、みなさんもぜひ当館までお越し下さい。

(学芸員 桂 嘉志浩)

お知らせ

自然史資料館の「お宝」とイベント「ミュージアムデイ」

自然史資料館には多数の重要な自然史関連の標本資料が良好な状態で保存されています。この度、そうしたお宝とも言える標本資料について皆様に公開する機会(バックヤードツアー)を設けました。また、今回は特にトキに注目し、県内の専門家による講演会を企画しました。

「ミュージアムデイ」-トキ剥製その他の資料公開-

期間: 令和6年5月18日(土)、19日(日)

<講演会>

「飼育ケージから見たトキの生態」

竹田伸一 (いしかわ動物園)

5月18日(土) 午後2時~4時

<バックヤードツアー>

5月19日(日) 午前10時~12時

午後2時~4時

(参加の申し込み等につきましては、当館のホームページをご覧ください)

トキにつきましては、石川県において放鳥の計画もあります。ただ、放鳥の候補地である能登地域におきましては、令和6年元日に起こりました能登半島地震の影響が甚大ではありますが、今後の復旧復興が可能な限り速やかに実施されることを願い、トキの放鳥計画も進行することを願うばかりです。

今回のような資料館でのイベントには能登を応援する思いもあり、多くの皆様の来館をお願いする次第です。

(館長 竹上 勉)



動物分野収蔵庫



地学分野の特別講義の様子（小松高校の生物実験室にて）



生物分野の講義に登場したシタバニハゴロモ。本種は、国内では2009年に小松市で初めて見つかった外来昆虫。

自然史資料館では、館内で様々な教育普及活動を実施していますが、外部からの講師派遣依頼に応じて、学芸員の専門性を活かした館外での特別講義も行っています。今年(2024年)の1月30日には、桂学芸員と嶋田学芸員が小松高校を訪れ、理数科1年生約40名を対象に、生物と地学分野の特別講義を実施しました。スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定されている小松高校は、「正答のない問題に粘り強く取り組み、解決することができる探究力を持った人材の育成」を目指しており、生徒たちは熱心に研究活動に取り組んでいます。今回は、新年度から始める課題研究のテーマ選びに役立つように、「フィールドワークに焦点を当てた講義を行いました。

【生物分野】(講師:嶋田学芸員)

昆虫を対象としたフィールドワークを取り上げ、絶滅危惧種イカリモンハンミョウの定期的な個体数調査や、外来種シタバニハゴロモの卵塊を保護するワックスの機能に関する研究について話しました。シタバニハゴロモは2009年に小松市で初めて確認された外来種で、生徒たちは地元に縁のあるこの昆虫に強い関心を示し、「シタバニハゴロモの成虫はどのような場所にいるのですか?」、「卵はどうやって見つけるのですか?」など、積極的に

に質問していました。

【地学分野】(講師:桂学芸員)

アメリカ合衆国モンタナ州の恐竜化石調査を例に挙げ、化石発掘の具体的な方法や技術、フィールドワークの危険性と安全対策などについて語りました。生徒たちは「化石や地層調査のコツや留意すべきことは何ですか?」、「恐竜の色はどうやってわかるのですか?」など、興味津々の様子でした。

両講義を通じて、「失敗をおそれない姿勢」、「論文や学会発表などで成果を公表する重要性」、「当たり前や常識を疑うこと」、「何より研究を楽しむこと」など、基本的な心構えも伝えました。この講義で伝えた知見や経験が、生徒たちの今後の研究活動に役立ち、いずれは研究者として活躍する人材が現れることを期待しています。

昨年(2023年)の3月にも、SSH認定校である金沢泉丘高校から特別講義の要望があり、理数科2年生に対して実施したところ、とても好評でした。今後も、外部からの特別講義の依頼に応え、SSH事業にも貢献できればと考えています。

(学芸員 嶋田 敬介・桂 嘉志浩)

予告

第37回企画展「手取川の植物」

【場所】2階 企画展示室

【期間】令和6年7月20日(土)～10月27日(日)

手取川は、石川県最大の大きな河川です。長く広大な手取川流域には、川原に特有の豊かな自然が広がり、河川環境に適応したさまざまな水辺の植物がみられます。河川では、洪水によって「攪乱」がしばしば起こります。日本では雨や雪が多く降るので、川が氾濫して、川岸が水に沈んだり、流されたり、土砂で埋もれたりして、大きく環境が変化します。大きく環境が変化することを「攪乱」といいます。そういった攪乱が自然に起こる環境に合わせ、たくさんの河川の生きものがすんでいます。

近年、日本のほとんどの河川では、ダム建設により自然攪乱が減少しています。攪乱が起こる河川環境に合った生活をしてきた植物の居場所がどんどんなくなっていました。その一方で、河川改修工事や土地開発などによる人工的な攪乱が増加しています。河川の自然環境は、昔と大きく変わりました。

自然史資料館には、手取川流域で採集された多数の植物標本が収蔵されています。その大半は、川原健彰さんという方が採集した標本です。川原さんは、手取川ダムという大規模ダムの建設直後に手取川の植物調査を実施しました。河口から大日川との合流点付近までの長大な調査地を踏査して、生育する植物を調査するというものです。そして、冊子「手取川の植物」(全六報、1986年～1991年)にまとめ、報告しました。報告に記載されている植物は650種以上で、石川県に生育が確認された種数の4分の1以上にな

ります。全国的に見ても、詳細な河畔植生の調査記録と採集標本が残されている稀有な事例です。

本企画展では、2022年～2023年に実施した手取川の植物調査と川原さんによる約40年前の植物調査による報告をもとに、天狗壁川原の植物相と絶滅危惧植物群落の調査結果を中心に手取川の植物がどのように移り変わってきたのかを紹介します。手取川流域に遺された石川県の宝ものである植物の今と昔を伝えます。

(副館長 中野 真理子)



利用案内

- 開館時間：9:00～17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日：12月29日～1月3日

入館料：無料
駐車場：完備 (大型バス駐車可)

交通案内

【バスをご利用の場合】

金沢駅東口バスターミナル

- 『12 湯涌温泉ゆき』
- 『12 北陸大学薬学部ゆき』
- 『12 北陸大学太陽が丘ゆき』
→ 銚子口 下車
→ 徒歩約10分
- 『95 北陸大学太陽が丘ゆき』
- 『95 北陸大学薬学部ゆき』
→ 【北陸大学太陽が丘】下車
→ 徒歩約10分

